

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月28日現在

機関番号：16401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21792220

研究課題名（和文） 乳がん治療経験者の性生活に対する戸惑いと看護職者への期待

研究課題名（英文） Anxiety Regarding the Sexual Life and Expectations of Nurses' Approaches to Breast Cancer Survivors

研究代表者

青木 早苗（AOKI SANAE）

高知大学・教育研究部医療学系・講師

研究者番号：40516168

研究成果の概要（和文）：乳がん治療経験者は、治療後の性生活において《お互いの気持ちを察するが、身体的苦痛があり性生活がしっくりいかない》を中心に5つに集約される戸惑いを体験していた。また、看護職者に《個別に合わせたタイムリーな情報提供》、《性相談も含め、乳がんに関心した看護師と関われる場と時間の醸成》などを期待していた。治療後の性的適応には、本人だけでなく、パートナーの存在が大きく影響する。看護者は、もともとの性生活を加味しながら、パートナーも含めて個別な性問題に関わっていく必要がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, breast cancer survivors experienced an anxiety regarding their sex lives after treatment, which were classified into 5 categories, such as <difficulty in leading a healthy sexual life due to physical distress despite a favorable relationship>. They expected nurses to provide them with <information at an appropriate time to meet individual needs> and <opportunities and places to consult nurses specialized in breast cancer>. It was also shown that the process of post-treatment sexual adaptation greatly depends on not only survivors themselves, but also their partners; therefore, it may be necessary for nurses to deal with individual sexual problems, while considering survivors' previous sexual lives, including partnerships.

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 2010年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 2011年度 | 200,000   | 60,000  | 260,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：乳がん 治療経験者 性生活 戸惑い 看護職者 期待

## 1. 研究開始当初の背景

日本は、欧米と比較すると乳がん死亡率は低いものの、日本人女性のライフスタイルの欧米化により、乳がんの罹患率は上昇傾向にある。それに伴い乳がんの診療も飛躍的に発

展し、乳がん治療経験者の延命はエビデンスに基づいた集学的治療により急速に向上している。

しかし、乳がん治療経験者のQOLの維持・向上、とりわけ性生活への看護職者の支援は、

皆無に等しい状況にある。家庭や家族は、ひとの生活の中で最も基盤になるものの一つであり、特に夫婦関係は重要である。先行研究では、手術や治療から生じてくるストレスによってパートナーとの関係が大きく影響されること（伊奈, 2004）や乳房切除術を受けた患者では、患者が術後どのような自己イメージを抱いているかが、人間関係や性生活に大きく影響を与えること（今井, 2000）を明らかにしている。また、乳がん看護認定看護師は、外来相談で乳房温存術後、残存乳房内の再発による痛みにより夫との性生活についての悩みの相談を受けた事例について語っている（高橋, 2008）。以上のことから、乳がん治療経験者は、ボディーイメージの変容はもちろんのこと、乳がん切除部位の痛み・圧迫への不快感、予後・再発・転移の恐怖、化学療法・ホルモン療法・放射線療法の副作用などが性生活に影響し、性生活について様々な戸惑いを感じているのではないかと考えられる。性生活への支援の必要性を感じ、実際に医療者の段階的関与に関するPLISSITモデル（Jack Annon, 1976）を用いて介入している報告もある（小野, 2008）。しかし多くの場合、患者と医療者双方が性を語ることへの躊躇、相談を持ちかけるには、外来環境の制約によりプライベートな相談ができないこと、そして性に関する個別性が高いことなどにより、乳がん治療経験者の性生活の戸惑いに対する看護職者の理解も乏しく、支援まで至っていないのが現状である。

## 2. 研究の目的

- (1) 1996年から2010年に発表された乳がん治療経験者のセクシュアリティに関連する文献を用いて研究の動向を分析し、今後の研究課題を明らかにする。
- (2) 乳がん治療経験者の治療後の性生活において、パートナーとの関係性がどのように変化したのかを明らかにする。
- (3) 乳がん治療経験者が、治療後の性生活においてどのような戸惑いを体験しているのかを明らかにする。
- (4) 乳がん治療経験者が性生活において看護職者にどのような期待をしているのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

研究目的(1)について

- ①分析対象：web版医学中央雑誌（ver. 4）およびJDreamII マルチファイル（JMEDIPlus JST）を使用し、1996年から2010年までの15年間に掲載された論文を対象にキーワード[乳がん]、[セクシュアリティ]、[性生活]、[生殖]、[性機能]、[夫婦]、[関係]について検索を行う。
- ②分析方法：対象文献1件に対して1枚の文

献カードを作成した。研究デザインは、Diers, Dの研究に基づいて、南が分類した問いのレベルと研究デザインの関係（南, 2008）を基に分類した。この文献カードを用いて、論文の分析シート一覧を作成し、分析を行った。分析は、文献カードの記載内容から、年次別推移、研究の種類、研究デザイン、データ収集方法、研究対象、研究内容を分析した。

研究目的(2)について

- ①研究対象者：対象者は、乳がんと診断され、乳がん手術を含む乳がん治療を経験した人、または治療を受けている人である。また、乳がんの好発年齢を考慮し、中年期の女性とする。研究協力者は9名であった。
- ②データ収集方法：データ収集は、同意が得られた研究参加者に対し、インタビューガイドを用いて半構成的面接を外来受診時、または外来治療時などの1回実施した。
- ③分析方法：乳がん治療経験者とパートナーには、治療後関係性の再構築が必要であり、本研究で明らかにする現象は、乳がん治療経験者とパートナーの「かかわり」が再形成され、成熟されていくプロセス性を持つ。よって、ヒューマンサービス領域の現象特性としてのプロセス的性格を分析する手法として用いる修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の手法を用いて分析した。

研究目的(3)について

- ①研究対象者：対象者は、乳がんと診断され、乳がん手術を含む乳がん治療を経験した人、または治療を受けている人である。対象者の年齢は、乳がんの好発年齢と治療が性生活に影響すると考えられる20歳以上60歳未満の女性とした。研究協力者は19名であった。
- ②データ収集方法：データ収集は、同意が得られた研究参加者に対し、インタビューガイドを用いて半構成的面接を外来受診時、または外来治療時などの1回実施した。
- ③分析方法：データの分析は、ICレコーダー、またはメモをとった面接内容の逐語録を作成し、佐藤らの継続比較分析法（佐藤, 2008/木下, 2006）を参考に質的帰納的に分析した。

研究目的(4)について

- ①研究対象者：対象者は、乳がんと診断され、乳がん手術を含む乳がん治療を経験した人、または治療を受けている人である。対象者の年齢は、乳がんの好発年齢と治療が性生活に影響すると考えられる20歳以上60歳未満の女性（初期治療時の年齢）とした。研究協力者は20名であった。
- ②データ収集方法：データ収集は、同意が得られた研究参加者に対し、インタビューガイドを用いて半構成的面接を外来受診時、または外来治療時などの1回実施した。

③分析方法:データの分析は、ICレコーダー、またはメモをとった面接内容の逐語録を作成し、質的帰納的分析法の手順に沿って分析を行った。

#### 4. 研究成果

研究目的(1)について

該当文献は、21文献であり、研究の種類は量的研究が81.0%、研究デザインは量的記述研究が71.4%、研究対象は、患者が71.4%を占めていた(表1参照)。研究内容は、《セクシュアリティサポートの実態と必要性》、《乳がん治療が及ぼすセクシュアリティへの影響》、《治療の影響で起こるセクシュアリティの問題に対する心理》、《乳がん治療後のセクシュアリティに影響するパートナーとの関係》の4つのカテゴリーに集約された。以上の結果より、乳がん治療経験者のセクシュアリティサポートの必要性は示唆されているものの、乳がん治療経験者とパートナーの心理・介入研究、パートナーや医療者の教育に焦点をあてた研究が今後必要であることが明らかになった。

研究目的(2)について(図1参照)

乳がん治療経験者の性生活におけるパートナーとの関係性は、治療後【身体の変化により性生活に抵抗感がある】段階からスタートし、ある程度時間が経った段階で【生理的欲求を満たす対象】としてパートナーとの性生活を徐々に再開していた。そして日々戻りつつある生活のなかで、【支え合うきずなとしての存在】としてパートナーとの絆を深めながら、【元の性生活に戻る】変化を辿っていた。また、【身体の変化により性生活に抵抗感がある】こと、『女性機能を失っても続く関係』は、性生活が元通りでなくても、【支えあうきずなとしての存在】としてパートナ

ーを再認識する一方で、性生活については語らない現状があり、【互いに踏み込めないことがある】と感じていた。【互いに踏み込めないことがある】関係では、お互いに話さなくても大切な存在であると思っている者もいれば、病気や性生活についてパートナーは、『期待には応えてくれない』存在と諦めている者もいた。医療者は、羞恥心を伴うと同時に個人差のある性的問題に対し、乳がん治療経験者とそのパートナーが、いつでも性相談を受けられ、戸惑いを表出できる環境と情報を提供していく必要性が示唆された。

表1 文献の概要 (n=21)

| 項目                        |              | 数  | %    |
|---------------------------|--------------|----|------|
| 1. 研究の種類                  | 1. 質的研究      | 4  | 19.0 |
|                           | 2. 量的研究      | 17 | 81.0 |
| 2. 研究デザイン                 | 1. 質的記述研究    | 4  | 19.0 |
|                           | 2. 量的記述研究    | 15 | 71.4 |
|                           | 3. 仮説検証型研究   | 2  | 9.5  |
|                           | 4. 因果関係検証型研究 | 0  | 0.0  |
| 3. データ収集方法<br>(重複回答 n=23) | 1. 質問紙       | 14 | 60.9 |
|                           | 2. 既存の尺度     | 2  | 8.7  |
|                           | 3. 面接法       | 4  | 17.4 |
|                           | 4. 観察法       | 1  | 4.3  |
|                           | 5. 患者との面接記録  | 1  | 4.3  |
|                           | 6. 診療録・看護記録  | 1  | 4.3  |
| 4. 研究対象                   | 1. 患者        | 15 | 71.4 |
|                           | 2. 夫(パートナー)  | 3  | 14.2 |
|                           | 3. 看護師       | 2  | 9.5  |
|                           | 4. 医師        | 1  | 4.8  |

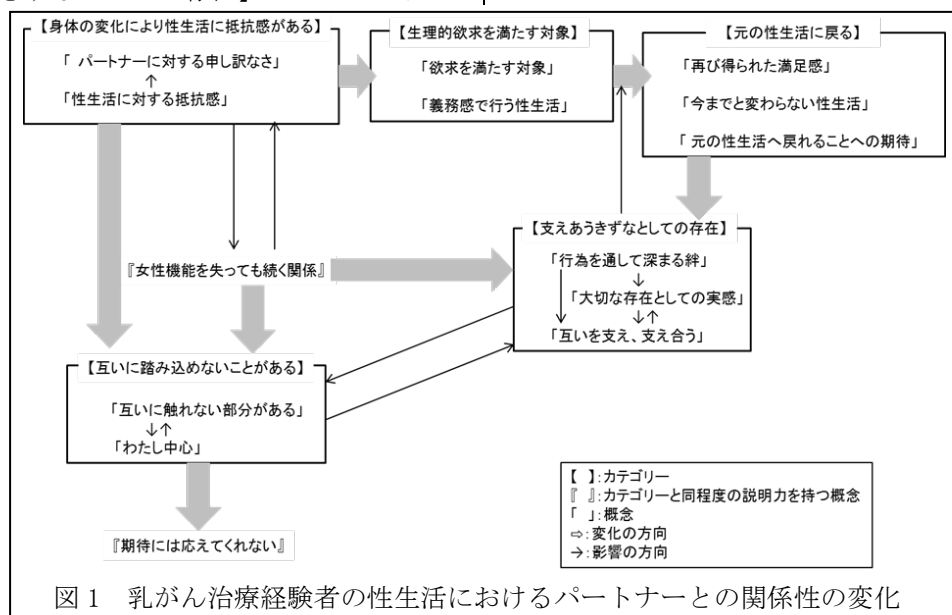


図1 乳がん治療経験者の性生活におけるパートナーとの関係性の変化

研究目的(3)について(図2参照)

乳がん治療経験者の性生活に対する戸惑いは5つのカテゴリーで構成された。乳がん治療経験者は、パートナーとの性生活において、《治療によるお互いの性反応の低下》に戸惑いを感じていた。自分の性反応の低下は、[パートナーの性欲に応えたいが応えられない]など、《お互いの気持ちを察するが、身体的苦痛があり性生活がしっくりいかない》戸惑いにも影響していた。また手術療法では、たとえ温存療法であっても、《術後変化した乳房を見た後のパートナーの反応が気になる》ことで《性交に没頭できない》と、《手術の痕に敏感になり、性生活に踏み込めない》と語っていた。乳がん治療後は、大切な存在としてパートナーを認識する一方で、

《治療を受けた自分を理解して性交をしてくれない》ことにも戸惑いを感じていた。このように乳がん治療経験者は、治療後の性生活において、様々な戸惑いを体験するが、[性生活については他者に聞きづらい]内容であり、《妊娠・出産の可能性、性交再開時期が不明確》など、《性相談をする環境がなく性問題の表出に躊躇する》ことにも戸惑っていた。治療後の性的適応には、本人だけでなく、パートナーの存在が大きく影響する。看護師は、治療がどのように性的合併症を引き起こすのかを理解した上で、乳がん治療経験者とそのパートナーのもとの性生活を加味しながら、個別な性問題に関わっていく必要がある。

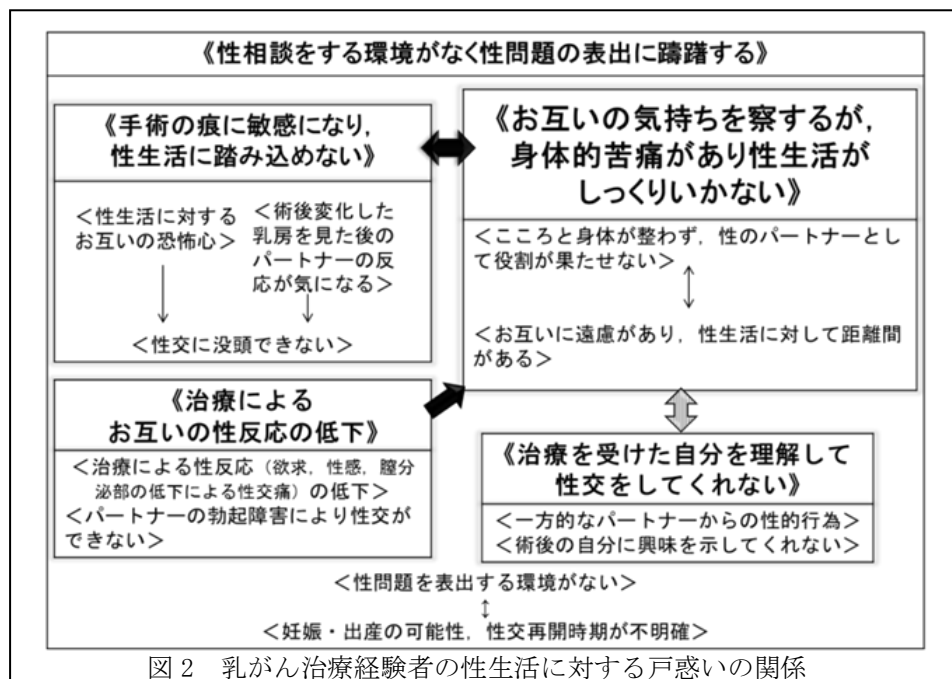


図2 乳がん治療経験者の性生活に対する戸惑いの関係

研究目的(4)について(図3参照)

乳がん治療経験者が治療後の性生活において看護職者に期待することは、5つのカテゴリーで構成された。乳がん治療を受ける場合の性生活についての説明は、《個別に合わせたタイムリーな情報提供》を期待していた。《個別に合わせたタイムリーな情報提供》の場では、《専門的立場での助言》や《疑問の解決》を期待していた。しかし実際は、《看護師と接する時間の確保》不足があり、プライベートな内容を話すためには、《性のことも含めた支援》を行うなど、《性相談も含め、乳がんに関する看護士と関われる場と時間の醸成》が必要だと感じていた。また、《個別に合わせたタイムリーな情報提供》をするためには、《羞恥心を感じない配慮》が必要

であり、《個別に合わせたタイムリーな情報提供》を受ける場合は、自分だけでなく《パートナーと一体での支援》を期待していた。このように、乳がん治療経験者の性生活において看護職者に支援を期待する一方で、《自分で対処できるので必要ない》と感じている女性もいた。

乳がん治療後の性生活は、羞恥心を伴う繊細な問題であるため、乳がん治療を受ける女性とそのパートナーへの配慮が十分に必要である。同時に、個々に合わせたタイムリーな情報提供や時間・場の調整、看護職者の専門的知識の習得が必要である。

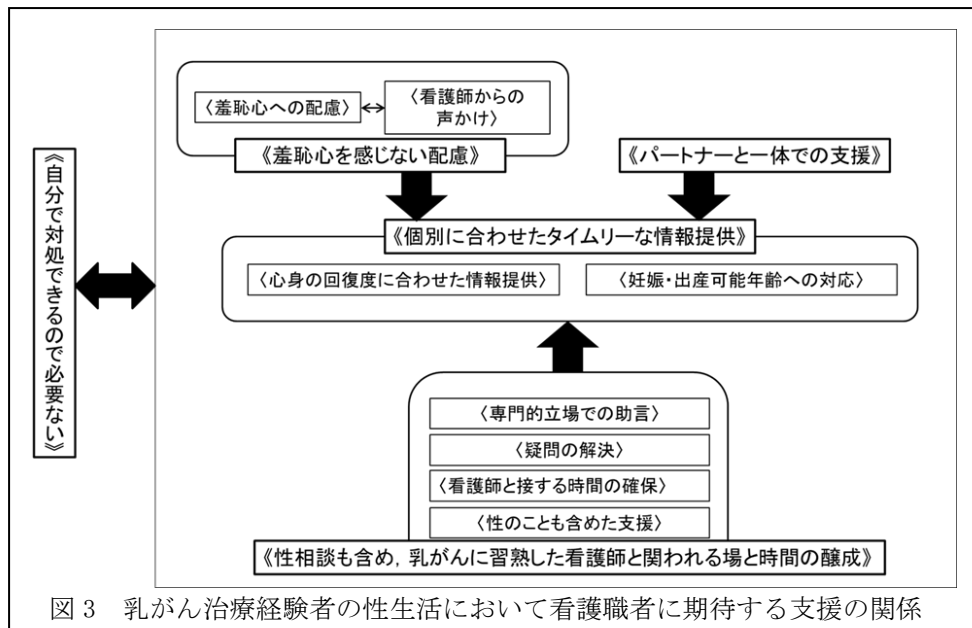


図3 乳がん治療経験者の性生活において看護職者に期待する支援の関係

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 青木早苗, 藤田倫子: 乳がん治療経験者のセクシュアリティに関する研究の動向と今後の課題, インターナショナル Nursing Care Research, 査読有, 10(4), p23-33, 2011.

[学会発表] (計3件)

- ① 青木早苗, 山脇京子, 藤田倫子: 乳がん治療経験者の性生活に対する戸惑い, 日本がん看護学会, 第25回学術集会, 2011/2/12, 神戸国際展示場.
- ② 青木早苗, 山脇京子: 中年期乳がん治療経験者の性生活におけるパートナーとの関係性, 日本がん看護学会, 第24回学術集会, 2010/2/14, 静岡県コンベンションアーツセンター.
- ③ Sanae Aoki, Kyoko Yamawaki, Michiko Fujita: Relationships between middle-aged, former breast cancer patients and their partners in Japan, the 16th International Conference on Cancer Nursing, 2010/3/7, The Westin Peachtree Plaza Atlanta Georgia USA.

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木 早苗 (AOKI SANAE)  
高知大学・教育研究部医療学系・講師  
研究者番号: 40516168